

講演会

被災文化遺産から学ぶこと 企画展「東日本大震災 文化遺産の被災調査と救援活動」より

日程：2011年12月10日（土）

場所：世田谷キャンパス 34号館 B301 教室

コーディネーター：沢田 正昭（国士舘大学 21世紀アジア学部）

戸田有二（国士舘大学文学部）

「津波と遺跡の関係」

国士舘大学文化遺産学研究プロジェクトは、東日本大震災及びそれに伴う津波の被害の状況について2011年4月から現地にて調査を開始した。過去の被災状況等を交差することで今後の復興計画・防災計画などに反映させ、これから起こりうる巨大地震・津波に対する対策や文化遺産史料の展示や収蔵のあり方などを検討した。

福島県相馬地方の南相馬市鹿島区では120箇所ほどの遺跡が確認されているが、そのうち海岸近くに営まれた縄文時代や弥生時代の遺跡は殆どが低台地に営まれていたため無事であった。古墳群は、1箇所、干拓した八沢浦地区にある横穴墓が津波の被害を受けている。中世の城館跡については、小島田地区の小島田城館が津波を受けたことがわかっている。南相馬市原町区では300箇所以上の遺跡が確認されているが、そのうち20箇所以上が被害を受けたと見られている。新田川の北岸地域で、多数の遺跡が津波の被害を受けた。また南岸でも15mの津波が襲い、縄文時代から平安時代までの11遺跡が水没している。その他の地域でも大きな被害を被った。南相馬市小高区は、福島第一原子力発電所事故の立ち入り禁止区域にあたるため衛星写真での確認となったが、小高川沿岸では野間沢遺跡や西内館跡をはじめとして、縄文時代から中世までの遺跡までいくつかの被害が認められている。こういった被災状況を、写真やデータ分析などを用いて紹介した。その他本報告では岩手県の陸前高田市立博物館や海と貝のミュージアム等における被災状況の調査もまとめている。

高妻洋成（奈良文化財研究所）

「大津波で被災した古文書を救えー保存修復科学の貢献ー」

2011年3月11日に発生した巨大地震とそれに伴う津波により、国指定文化財及び地方自治体が指定・登録している文化財も多大な数が被災した。その中でも、水損した文書はカビや腐敗により壊滅状態になる可能性があり保存に向けた緊急性が高い。それにかかるレスキュー作業について、事例及び方法論等を報告した。

震災後の文書レスキュー活動の事例には、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク、神奈川大学日本常民文化研究所、東北芸術工科大学等による活動があり、以前より関わりのある地域等におい

て迅速に救援を行った。水損した文書には、旧伊達領の近世文書や漁業・地下資源に関する史料、学校や役場などのコミュニティ関係の文書など重要なものが多く、その応急処置・本格処置をどのように考えるかが問題となっていた。カビや腐敗を一時的に停止させるには冷凍保管が、また文書を固着させずに乾燥させるには真空凍結乾燥がよいとされているが、それに際して必要となる機材の使用には、国内19の機関から協力を得ることができた。最も大きな問題であった冷凍倉庫については（社）日本冷凍倉庫協会のネットワークにより手配が実現、レスキュー体制確立に大いに寄与した。水損文書の保存修復作業におけるクリーニング法には、ドライクリーニング法やフローティングボード法があり、乾燥法には真空凍結乾燥法のほかにスクウェルチドライイング法やエアストリーム乾燥法などがある。その方法や論理などについても紹介した。

いつなんどきでも災害の起こりうる日本においては、これからも危機管理が大事となってくる。危機の予測の予防として、文化財が被災しない管理体制を確立し、回収と処置として、被災文化財の迅速な救援システムを構築することを提唱した。

「鼎談 救援活動」

沢田

救援活動には、国際的なものから地域的なもの、遺産には、有形のものから地域のお祭りといった無形のものまで、多種多様に交じり合っていますが、今回はこの大震災で携わった救援活動についてそれぞれ話をしてみたいと思います。

まずは、救援活動での協力体制についてですが、ボランティアだけでなく専門的なことに携われる、また活動の司令塔となれる人材について、そして冷凍庫を借りるといったような資金について考えてみます。

高妻

真空凍結乾燥を行う際、（社）日本冷凍倉庫協会には冷凍庫を無料で貸してくださる、とおっしゃっていただきました。けれども断りました。非常に高額ですし、そうしますと一年も続けられませんでしょうから。今は、先方からしたら利益の出ない範囲ですが、お支払いをしています。そういった意味でもお金は必ず掛かりますね。被災した当初は人命やライフラインへの支援が中心でしたが、やっと文化財のレスキューにもお金が回ってくるようになりました。今後は、最初から必要分の資金を得ることのできる仕組みを作っていく必要があると思います。

戸田

私が支援してきた内容ですと、文化財の現状を確認するために地域の人の協力が必要です。ただ、人によって厳しい現実直面している人もいるわけで、そういった中での活動、そして人との繋がりをどうもっていくか。それがいろいろ大変でした。

沢田

文化財や建築の破損状況に関しては、過去の経験からつくられてきたマニュアルが力を発揮しました。

戸田

遺跡は、水の来ないところに作られたものが多いのです。人びとは、ずっと前から生活空間・居住空間に関する知識を積み上げてきたんだなと思いました。これからに生かすには、マップ作りを考えています。

高妻

文化財というのは、個人と地域の繋がりでもあるんですね。江戸や明治ですと意識しやすいのですが、それより古い時代でもやはり自分たちの祖先から連綿と続いているものです。今回それが失われたことが雰囲気として出てきている。地域との繋がりを意識するには、やはり文化財というのが大事なのです。

沢田

大学というのは、人間形成といいますか、人との絆としての機能を果たすところもあるかと思っています。国士館大学でもいろいろな活動を行い、また報告会も催されています。

戸田

私は、埋蔵文化財を支援するには、その地域に住まう人々との繋がりを持つことが大事だと考えていますが、大学人だからこそ可能だという部分もあるかと思っています。

高妻

若い学生の皆さんには、人との関わっていく中で、東北というのとは何なのか、日本というのとは何なのか、ひとつの学びから派生して大きな枠の中で考えることを醸成してくれればと思っています。

沢田

古文書の救援活動の一環で、保存作業に関する講習会を開きました。というのは、参加者の中には初めて古文書に触れるという方もいらっちゃって、そういった方の知識や見識に何か寄与できないかと思ったのです。専門家の知識が必要な作業もありますが、自分たちでできるものもありますからね。講習会で学ぶことによってハードルが低くなったのではないかと思います。

本日のまとめとして、ポイントが三つ上げられるかと思います。まずは、危機管理をどうシステム化していくか。それには、減災及び防災の管理体制を作っていく必要があるかと思います。次に防災意識の喚起。これには、文化財を見て回るような企画や勉強会を行って理解をしてもらうこと、そして博物館や美術館などの機関同士の連携体制を培うことが不可欠です。ここでは地域に密着した大学の活動、それを可能にするネットワーク作りが大事になってきます。最後に、救援体制ですね。今回、海外からの救援体制を受け入れる体制がすぐには整いませんでした。出かけるにしても受け入れるにしても、その両方を含めた国際貢献としての救援活動。こういったポイントをこれからも考えていかなければと思います。